# 不滅の光インドの貧者に

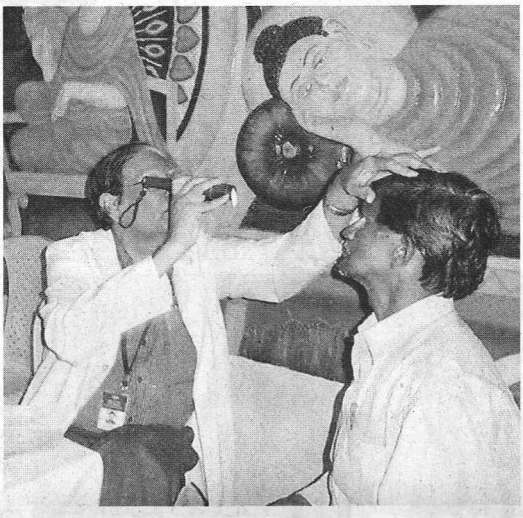
## 比叡山に14年間留学の僧

## 母国で白内障手術支援

比叡山延暦寺（大津市）の留学生として14年間日本で学んだインド人僧侶、サンガラトナ・マナケさん(52)が、母国で低所得者層の白内障手術を支援している。現地では気候などの影響で白内障患者が多いが、治療が進んでいない。このため、国際医療NGO「AMDA」（岡山市）や天台宗と連携して患者に手術を促し、今年2～9月に75人が回復した。比叡山での修行経験がマナケさんの支えになっている。【石川勝義】

サンガラトナ・マナケさん

マナケさんはインド中央部のナグプール出身。父は、インド憲法を起草したアンベードカル（1891～1956）の側近だった。アンベードカルはヒンズー教の身分制度による差別を打破するため、仏教への改宗運動を指導した。父はその遺志を継いで運動に取り組んだ。ナグプールは運動の中心地だったが、マナケさんが生まれた62年は寺院すらなかった。両親は「社会を改善できる人に育ってほしい」という思いを込め、自宅に滞在した日本人僧侶に当時9歳だったマナケさんを託した。



白内障の手術前検診を受ける男性＝インド・ナグプール近郊の仏教寺院で今年2月、マナケさん提供

マナケさんは1971年に来日。大津市内の小中高校に通いながら、比叡山で百日回峯（かいほう）行などの修行に励んだ。85年に古里に戻り、現在は寺院の住職を務め、孤児院も運営している。

マナケさんによると、現地は気温が45度を超えるほど日差しが強く、乾燥してほこりが多い。そのため50歳以上の多くが白内障を患っているが、貧困や医療知識の乏しさのため治療が進んでいない。

マナケさんが住民を集め、地元の眼科医が診察。白内障と診断された人のうち、糖尿病などがない人に手術を実施している。AMDAが窓口となって天台宗の「一隅を照らす運動総本部」から巡回医療費などを含め毎年1665万円の寄付を受け、3年間続ける方針だ。

両親の思いを背に日本に留学したマナケさんは「私の思考、感性は比叡山で形成された。宗教と関係なく、誰であれ必要とする人のために役立ちたい」と話している。